

我々に欠けているもの

宮 本 義 海

。 探 検 や じ り ま 論

もし、毎朝夕、なんの抵抗もなく読んでいる新聞が、突然配られなくなったら、どうであろうか。東京で起きた交通事故、九州での殺人事件、それらは我々の生活に何の影響力も持っていないのに、一生懸命読んでいる図はまことに滑稽でもある。それならば、人間はどうして新聞を読んだりラジオ、テレビを見聞きするのであるか。それは、火事場にかげつけるのと同じく、自分の目や耳でより詳しく知りたいという本能的欲求の表われであり、隣の街の事件から日本中へ、そして今や全世界の事件をもより親しく確かめたいとその範囲は拡大していく。この欲求こそ、人間生来のやじりま精神によるものである。

そして、その精神旺盛なる者は、新聞も伝えてくれない、人も教えてくれない、人知れぬ世界のことまでも知りたい、しいては自分で確かめたいと欲するのである。そしてこの行為こそ、探検への行動であり、我々こそ、そのもっとも欲ばりな集団なのである。

。 我々に欠けているもの

5 パート制が確立されて5年、その個々の活動はまさに特長を出しきった上で、数々の成果を上げてきた。しかしながら探検部という組織を考える時、その良否は別として、全体的なまとまりが無くなってきているのではないだろうか。その要因としては、部員数の増加、パート専門化の進展

気質の変化等が考えられるであろう。又一方、パート分化の現象として、海外遠征・海蝕洞調査等の複合パートによる活動も進められてきている。この活動こそ、我々が5 パート制を進めてきた課題ではなかったろうか。(そうでなかったにしろ私はそうした夢を持ちたい)「俺は山をやる、だからお前は洞窟をやれ、そして、いつの日か……」という気持があったのではないか。

これを追し進めていく為に我々は先ず己の領域を拡くすることを考えなければならない。学生探検に於いて学術探検はやれないとか、いや、学生だからこそ学術探検をめざすべきだとか、地理的探検の意味もあわせてその論議はことあるごとに行なわれてきた。その正誤は別として、今私は、それ以前の事を強調したい。それは地理学であれ、人類学であれ、又考古学であれ、それをひもとうとするムードに欠けているのではないかということである。例え地理的探検をやるにしても、我々の持ち得る知識等の全ての可能性を追い、着実に自己を拡大していく姿勢は常に持ちつづけなければならないものである。そして、その結果として学術探検がやれたとしたらこの上もないことである。仮に植物採集をやるとして、それ以前のことをどれだけのものがやろうとしているであろうか。さらに、もっともまちがった風潮として、その活動に関して、与えられるものであり、自から創り上げていこうとするものではないと云った、不謹慎な考えが、はびこっていることである。これからの脱却の為に、今我々は先ず、各人が名ブラン

ナーとなることであり、その為の努力をおしみな
く進めていくことではなからうか。

求であろう。しかし、だからと云って、唯、行き
たいという、動だけの行為であってはならない。
その上につく、プラスアルファをどれだけもちえ
るかが探検の発展を意味するのではないだろうか。

探検というものは、そもそも人間の本能的な欲

みやもと・ぎかい (文学部学生)

